

文化財センター通信

【かざぐるま】

風車

第 25 号



紀州の歴史と文化の風

財団法人 和歌山県文化財センター

連続特集

重要文化財 福勝寺 その5

今回は福勝寺の修理現場から、主に本堂の解体修復作業の様子を紹介します。

木

組は、文化財建造物の修理においては、解体した部材に必要な修理を施し、もとの位置で再用することを原則としています。構造的な強度や耐久性を確保しながら、少しでもオリジナルの部分を残すよう、慎重に作業を進めます。



腐朽した柱の根継(補材)

修

理には、オリジナルと同じ樹種の木材を用います。福勝寺本堂には、松や楠が主に用いられていま

した。必要な補足材には、樹種や寸法など、製品としては一般に流通していないものばかりのため、原木などを集め、元の木取りで製材しています。

伝

統的な建物の柱や梁などの構造部材の多くは、精巧に加工された木組によって組み立てられています。百年単位の将来を見越した修理が求められる文化財建物においては、安易に金具などに頼ることはせず、継木や矧木と呼ばれる伝



柱を一本づつ丁寧に補修しています

— 第 25 号の主な内容 —

1. 連続特集 重要文化財福勝寺 その5
2. 西洋釘の時代
中筋家住宅修理現場から

◎重要文化財福勝寺保存修理工事事務所◎
649-0144 海南市下津町橋本1065番地
tel./fax. 073-494-0312

◎重要文化財旧中筋家住宅保存修理工事事務所◎
649-6324 和歌山市赤宣148番地
tel./fax. 073-477-5969



軒を支える組物の補修(楠材)

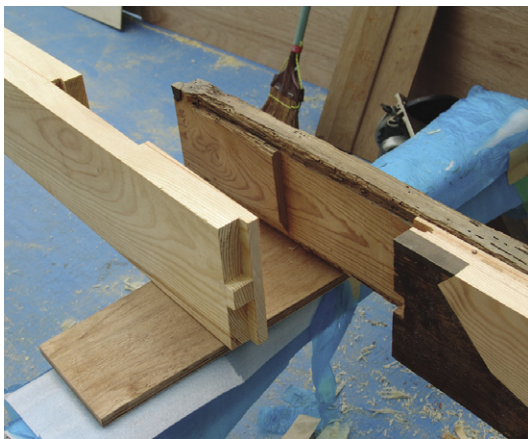


修理材は原木で購入し製材所で挽き出します(写真は桐の原木)

金物については、例えば昔の建物よく耳にします。実際、各部材の巧みな木組が、建物構造の根幹ですが、さすがに板などを止める場合は、和釘などの伝統的な金物が使われています。

新しく取り替えた部分は、完成し納まるよう、柿渋や松煙墨しょうえんずみなどを用いて古材との色合わせをおこないます。そして元通り組み立てることで木部の修理は完成します。

統技法を駆使して修理しています。しかし数百年の歴史を持つ建物の部材には、痛みが進んだものも少なくありません。福勝寺でも、室町時代の墨書ぼくしょが数多く記された柱や壁板などには虫害が進んだものもあり、伝統的な技法では残しきれない部分が多くあります。このような貴重な歴史資料を残すために合成樹脂など現代の技術を用いた修理も行います。合成樹脂には、シミや耐候性などに難点がありますが、場所や状況に応じて種類を使い分けるなど、細心の注意を払って作業を進めています。



▲ 頭貫の継ぎ木補修(桐材)

虫害を受けた柱の表面には人工木材を詰める ▼



▲ 松材の丸桁の矧ぎ木修理

墨書の記された琵琶板の虫穴にはボンドを注入して補強 ▼



和釘は現代の洋釘と異なり、四角い断面で楔型くさびをしています。また鍛造たんぞうして作られるため、錆にも強く、解体する際木材を痛めにくい、すぐれた特徴が

あります。このため今回の保存修理でも、今後の修理のしやすさを見据え、和釘を製作して使用するようにしています。



巴瓦の製作（左が本堂の当初瓦・室町時代、右が補足瓦の生型）



和釘を手打ちで製作している様子



鬼瓦の製作（左が生型、右が本堂隅棟の当初鬼瓦・室町時代）

瓦

については、割れやひびが入った瓦を除き、古い瓦は一枚ずつ洗って再利用します。足りなくなった分

は、オリジナルと同じ形に復原して作ります。しかし現代の技術で作ると強度や耐水性は向上するものの、粘土の密度があまり重くなったり、均質すぎず古瓦と風合いがあわないなどの欠点が出ます。このため、品質を確保しながらも、部分的に古い技法を用いるなど、重量や色調・質感などを可能な限りオリジナルに近づけるよう工夫しています。（多井忠嗣）

【中筋家住宅修理現場から】

西洋釘の時代

現在、私たちが見る釘は、丸い断面をしています。これは鉄線材を機械加工したもので、大量生産されています。いっぽう古代から近代まで、日本の木造建築で使われていた釘は、四角い断面で楔型をした釘です。文化財の世界では、このような角断面の釘を和釘、または角釘、丸断面の機械製品の釘を洋釘、または丸釘と呼び分けています。和釘は鍛冶屋が一本づつ手作りで製作したもので、古釘は打ち直して再び使うなど貴重なものでした。

洋釘というのはその名の通り、西洋から入ってきたからで、すでに一六一七年にはイギリス人によって製釘機械が発明されていたといわれています。明治時代になり、さまざまな文物とともに洋釘も輸入されました。最初の洋釘の輸入は明治一〇年（一八七七）頃で、明治一三年から一四年にかけての東京・横浜の大暴風と火災の復興需要で広まりました。輸入先はフランス、イギリス、ドイツ、オーストリア、アメリカと推移しますが、「西洋釘」などと呼ばれた洋釘は、高価な和釘に対し圧倒的な低価格で和釘に取って代わり、明治二五年頃には和釘はまったく使われなくなりました。明治三〇年には安田財閥の安田善次郎が東京深川に日本初の製釘工場を興し、国産の洋釘製造が始まりました。国産品は原料の鋼材確保で一時は伸び悩みますが、大正時代には輸入品を駆逐し、逆に輸出するほどの生産力を持つようになりました。

現在保存修理を進めている重要文化財旧中筋家住宅の「内蔵」には、床板や壁板などの留釘に、洋釘が使われていることが修理着手前から確認できました。ところが修理にあたって、雨漏りの



内蔵で使われていた舶来モノの洋釘
（写真は実物大）



置屋根野地板は洋釘と和釘を併用して張られていた



置屋根下の土屋根面には明治十九年十一月のへら書きがあった



内蔵の腰板張り下地の胴縁を留めていた和釘（貝折釘・実物大）

見られた庇屋根や置屋根部分を解体したところ、垂木や野地板の留釘に和釘も使われていることがわかったのです。しかも写真のように、一枚の板の片側は和釘、その反対側を洋釘で打ち付けているものもありました。和洋が完全に混用されているのです。

内蔵の建設年代は不明でしたが、和釘・洋釘が併用されることで、まず

は明治時代中期頃の建設と推定できません。幸いなことに、置屋根下の土屋根面に、へら書きが見つかりました。「明治十九年十一月」と読め、屋根面の壁

土はまだ柔らかいうちに棒のようなもので書いたものようです。このほかにも二ヶ所で「手伝 治平□」や判読不明の文字が見つかりました。これにより内蔵は明治十九年（一八八九）に

建設されたことが明らかになり、その際には和釘、洋釘が併用されたことが判明したのです。

安田善三郎の『釘』によれば、洋釘は輸入当初、新しいものの喰わず嫌いで、なかなか普及しなかったといいます。施主が洋釘の性能を信用せず、工事請負主に洋釘を使わないことを契約条件にしたこともあったようです。

また釘が頭から先まで同じ太さなので、抜け出してこないか心配なため、水に浸けて錆びさせて使ったり、また丸頭で目立つため、洋釘を用いるのを大工は罪悪視したといえます。

明治十九年、中筋家内蔵を建設した大工の腰に下げられた釘袋には、和釘と洋釘が混ざって入っていました。そのとき大工は、どんなことを思ったのでしょうか。手にした釘からも、西洋化、工業化に向かう時代の流れを感じていたのでしょうか。（御船達雄）

参考文献 安田善三郎『釘』私家版 大正五年

▼ 旧中筋家住宅修理での古釘戻し作業（和釘を叩き直して再用）



【お知らせ】
当センターのホームページでは、旧中筋家住宅、福勝寺の保存修理の様子を月ごとに報告していきます。ぜひご覧下さい。
TOP | 文化財建造物課の業務 | 旧中筋家住宅、もしくは福勝寺 | 工事報告

風車 第25号

平成18年7月25日発行
(財)和歌山県文化財センター

〒640-8404 和歌山市湊571-1
tel. 073-433-3843
fax. 073-425-4595
e-mail maizou-1@wabunse.or.jp
URL <http://www.wabunse.or.jp>